

Memory of PETER OSMERS

ペーター・オスメルス氏

Peter Osmer



ドイツメルヘン街道の終点、ブレーメンは、グリム童話「ブレーメンの音楽隊」で有名な街、そこでピーター・オスメルスは生まれ育った。そして、共にシスカ・ヘネシー社で働いて以来、タカ、ピーターと呼び合う、終生の友人となっていた。ブレーメンのヨハン・オスメルス社は100年続く設備工事会社で、市庁舎の屋根の上の鐘を見上げ、それがオスメル社から贈られたものだと、ピーターは誇りげに話し、ブレーメンの街を案内してくれた。海に面する場所から、向こう岸に見えるのはデンマークと説明を聞いて、地図で知っていたヨーロッパの隣国の理解とは異なる近隣国間の感覚を覚えた。同じシスカ・ヘネシーに勤めても、彼の属する部は給排水設備設計で、仕事の上では同じプロジェクトには関わることにはなかったが、アメリカでは共に外国人なので、ドイツ、日本の間に存在する、ある種の親しさで、勤務外で、オペラ、レストランとよく共に行動した。そして、ピーターが日本からアメリカに留学していた宇塚京子さんと結婚してサンフランシスコに移るとき、ニューヨークのウェストサイド、20丁目320番地のアパートを引き受けることになった。帰国後、ピーターは代々の名を継いで、オスメルス社の社長になって家業を継いでいった。

その後、何度かのブレーメン訪問の時、ピーターと京子さんと同行して訪れたのが、オスナブルックであった。ウェストファーレン条約で、カトリックとプロテスタントとの宗教戦争の終止符を打った講和の地であったが、そこは、ドイツ環境研究の先進の地で、国立の環境研究所を訪れる機会にも恵まれた。後年、ドイツ環境団体の招待で、再度、その地を訪れた折にはその前の週に訪れていたダライ・ラマ十四世が泊まった同じ部屋が用意されていて、ベッドから、同じ天井をながめて感慨深いものがあった。2000年には、ピーターの案内でブレーメンの市役所を訪問して、市の環境政策を知る手助けになった。その後彼は引退したが、息子さんはサンフランシスコでイラストレータ、娘さんはミュンヘンのJETRO で働いていて、ブレーメンの設備業界からオスメル家の血のつながりは消えた。学生時代にドイツ語の授業で習った「ペーターカーメンチント」への記憶のように、ピーターの素朴な気持ち、生き様は快く心の中に生きている。



ヨハン・オスメルス社

